ポスター報告 24

増田 洋介　立命館大学大学院先端総合学術研究科 一貫制博士課程

#報告題目　ぶっこわしながらつくっていく――脳性マヒ者・八木下浩一の地域観／施設観から

#報告キーワード　障害者運動　地域生活　施設

#報告要旨

本報告では、雑誌『市民（第二次）』1976 年 8 月号に掲載された座談会「障害者にとって施設とは」（高杉ほか 1976）と、『新地平』1976 年 11 月号に掲載された座談会「障害者が“地域で生きる”とは」（八木下ほか 1976）を題材に、なかでもとくに、埼玉の障害者運動の先駆者である脳性マヒ者・八木下浩一の発言に焦点をあてながら、その地域観／施設観の現在的意義について考察する。

八木下は、この座談会の以前も以降も一貫して、重度の障害者であっても地域の一般住宅で暮らすべきという考えをもっていた。しかし、在宅訪問で出会った障害者の生活をどうするかについて議論していくなかで、行政に対して定員 10 名のケアつき住宅を要求することになり、この運動をすすめるために結成された「川口に障害者の生きる場をつくる会」の代表になっていた。2 つの座談会は、運動が最終局面を迎えつつある時期に行われたものであった。

座談会のなかで、八木下は「施設を否定しながら施設をつくるという矛盾を自分で感じて、やっててイヤになるわけですよ」と心境を吐露している。そして、ほかの発言者が「生きる場」の意義を評価したことに対し、「あんなもの、ぼくはいいと思ってないよ。川口で 10 人の施設をつくったのは、それを媒介にしておもてに出ていくステップとして使うという意味ですよ。しょうがないからつくったわけですよ。いずれはぶっこわしますよ」と激しく反論した。また八木下は、市街地に小規模な施設をつくったからといって、行政や社会の考え方を変えなければ、さらにきめ細かく隔離収容されていくことにしかならないという意見に同調し、「10 人いたって、200 人、300 人いたって同じなんだよ。同じなんだけど、やっぱり、ぶっこわしながらつくっていく、つくっていきながらぶっこわしていくという作業を、これからやろうとしているわけです」と述べている。

こうした議論のなか、脳性マヒ者の三井絹子の夫で、施設を出た絹子と地域生活を始めていた三井俊明は、八木下らの運動に対して悲観的な立場をとっている。三井は、「当然に行政の側からいけば、『公共の福祉』という名のもとに、全体のニードということを盾にして出てくるだろう。そうすれば当然、施設認可基準なり、そういったものにあてはまった形での施設づくりに、行政としては向かざるをえない……行政に要請していったとすれば、そういう方向でまるめこまれるのがおち」だろうと述べている。座談会から約 1 年半後、市街地に定員 10 人の施設としてつくられたものは、まさに入所者が管理的に扱われる収容施設であった。この施設は、市が定めた「しらゆりの家設置及び管理条例」のもとで、1990 年代後半まで「ぶっこわされる」ことなく存続していった。

座談会から 40 年以上が経ったが、ここで行われた議論は、いまなお示唆的である。定員 10 人程度の「施設」は、グループホームなどの認可基準にあてはまった形で、至る所に存在するようになった。地域生活への支援も、行政の基準に沿った障害福祉サービスとして供給されるようになった。たしかに、障害者の生活を保障する制度は充実し、「全体のニード」は満たされるようになったのかもしれない。しかし、それは同時に、きめ細かく整備された制度の枠からはみ出すような生活が、さらに困難になってきたと考えることもできる。こうした状況のなか、どのような形で「ぶっこわしながらつくっていく」ことが可能であるのか。このことは、八木下以後の障害者運動が取り組むべき、現在的な課題ともいえる。

なお、本報告は「立命館大学における人を対象とする研究倫理審査委員会」から承認を得たうえで、同委員会の倫理指針を遵守して実施している。

＜文献＞

高杉晋吾・和田博夫・八木下浩一・鎌谷正代・三井俊明・三井絹子・新井啓太，1976，「座談会　障害者にとって施設とは」『市民（第二次）』11: 52-78.

八木下浩一・村田実・北野浩平・渡部淳・水沢洋，1976，「座談会　障害者が“地域で生きる”とは」『新地平』30: 52-63.